

令和7年度第1回岡山市総合教育会議

日時：令和7年5月22日（木）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時29分 開会

○司会 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第1回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、市長、教育長及び2名の教育委員会委員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 特段問題ないと思いますが、よろしいでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 では、よろしくお願いします。

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移ります。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしくお願いいたします。

○市長 それでは、次第に沿って議事を進めます。

本日の協議事項は、岡山市の子どもの現状とこれからの教育についてであります。学校現場における取組、ご提案など、幅広いご意見をいただくため、岡山市中学校長会の服部会長、また小学校長会の安東会長にもご出席をいただいております。また、岡山後楽館高等学校の矢吹校長、岡山大学大学院教育学研究科の熊谷教授にもご参加いただき、4名の方にも総合教育会議の議論に入っていただきたいと思います。

それでは、意見聴取者の方に自己紹介をお願いしたいと思います。

服部会長、よろしくお願いいたします。

○服部中学校長会長 失礼します。今年度、岡山市中学校長会長を引き受けさせていただいております岡山市立岡輝中学校校長の服部でございます。よろしくお願いいたします。

1学期は行事が多く、体育会は終わりました。修学旅行も終わりました。明日から本校は2日間、大山研修に行きます。かつては多くの中学校が大山研修、大山登山を行ってい

たんですけれども、いわゆるかつての立志行事の一つとして登山を残している恐らく岡山市唯一の学校です。今日の会議も大変重要な会議なんですけれども、私にとっては、明日子どもたちと一緒に大山の山頂に上がっている姿をイメージしながらこの会議に臨んでおります。よろしくお願いいたします。

○市長 どちらも重要。

それでは、安東会長、よろしくお願いします。

○安東小学校長会長 それでは、失礼いたします。今年度、岡山市小学校長会の会長を拝命いたしました安東でございます。現在、岡山中央小学校の校長をさせていただいておるところでございます。

中央小学校では、子どもたちにとって楽しい学校になってほしいと願って、いろんな取組をしています。例えば、学校をよくするキャッチフレーズを子どもたち自身がつくったりとか、それから学校のキャラクターとかを子どもたちから集めて、それをコンペティションのような形でICTを使ってみんなで投票したりして決めて、それで学校を子どもたち自身が進めていく取組をして、学校を楽しい場にしていく取組をしているところでございます。

○市長 どうもありがとうございました。

それでは、矢吹校長、お願いいたします。

○矢吹校長 失礼いたします。岡山後楽館高等学校校長の矢吹でございます。

岡山後楽館高等学校は、岡山市立唯一の高校で、総合学科の学校でございます。幅広い興味を持っている生徒とともに、実はまだ進路の定まらないような生徒も本校を選んで入学をしてくております。

後楽館高校は、岡山市をはじめ市内の企業様とか機関あるいはNPO、様々な団体の方々からの絶大なるご支援をいただいて、例えば去年は、高校生議会ということで、本会議場で岡山市の課題などについて意見を述べたり、あるいは提案をさせていただきました。市長さんにもいろいろとお答えいただきましてありがとうございました。こういった他校ではできないような貴重な体験の機会を提供していただいておりますことに心から感謝申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

それでは、熊谷教授、お願いいたします。

○熊谷教授 失礼いたします。岡山大学の熊谷でございます。専門は生涯学習とか社会教

育を専門としております。特に、学校、家庭、地域の連携や協働について研究しております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

では、協議事項、岡山市の子どもの現状とこれからの教育について、まず資料について教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 失礼します。今回の協議事項、岡山市の子どもの現状とこれからの教育について取り上げていただきました。本日は、資料4枚を使って説明したいと思います。

資料に掲載しているデータは、全国平均など、数値を比較できる調査結果であり、平均値より高いものにはピンク色、平均値より低いものには水色をつけております。

まず、1枚目をご覧ください。

学力については、第1期教育大綱を策定した平成28年度には、全国学力・学習状況調査の偏差値が48の教科もありましたが、第1期教育大綱に喫緊の課題として掲げ、教育委員会と学校が一体となって授業づくりに取り組んだ結果、令和元年度以降5年連続で全国平均レベル以上の学力を維持しております。

続いて、体力です。体力については、比較対象を大都市としております。小学校で平均を下回るものの、中学校では上回っている状況であり、小・中合算して考えると大都市平均レベルとなっていると考えます。大都市とは、指定都市に東京23区を加えたものを指しております。

次に、問題行動等についてです。平成28年度には、暴力行為の発生件数も不登校児童・生徒の出現率も全国平均よりも高い状況にありました。現在は、いずれも指定都市平均よりも低い状況を維持しています。特に不登校については、出現率が指定都市で2番目に低い状況でございます。

資料2枚目をご覧ください。

朝食の喫食率や就寝時間などの生活習慣は、全国平均レベルとなっています。

自己肯定感については、自分にはよいところがあると感じる子どもの割合や、先生が自分のよいところを認めてくれていると感じる子どもの割合は、全国平均よりも高い状況が続いており、自己肯定感の高さは岡山市の子どもの特徴であると考えております。

その一方で、夢や目標を持っている子どもの割合は、全国平均を下回っている状況でございます。

資料3枚目をご覧ください。

他者への関わりのうち、人の役に立つ人間になりたいと考える子どもの割合は全国平均レベルであるのに対し、人が困っているときは進んで助けると回答した子どもの割合は全国平均を下回っております。このことについては、昨年度の第3回総合教育会議でもお伝えしましたが、岡山市の子どもたちは、人の役に立ちたいという気持ちは育っていると感じますが、実際に人を助けるという行動に移す、つまりは実践力に課題があるのではないかと分析しております。

メディアコントロールについては、2時間以上テレビゲームをしている子どもの割合は全国平均よりも高く、スマートフォン等の使い方のルールを守っている子どもの割合は全国平均よりも低い状況にあります。

最後に、学習意欲について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげている子どもの割合は、全国平均よりも低い状況です。

4枚目をご覧ください。

3枚目までのデータを見やすくイメージ化したものになります。赤色の自己肯定感が全国平均を上回り、夢や目標、他者への関わり、学習意欲、メディアコントロールが全国平均を下回っています。体力は大都市平均との比較、問題行動等については指定都市平均との比較となっているため、別々のグラフで表しています。

この後の協議では、岡山市の子どもは自己肯定感が高いにもかかわらず、夢や目標を持っている子どもの割合や、人が困っているときは進んで助けると回答した子どもの割合が低いことなど、データから見える岡山市の子ども現状について、ご出席の皆様のお考えをお聞かせいただければと思います。

説明は以上です。ご協議をお願いいたします。

○市長 ありがとうございました。

データの結果を教えてくださいました。その要因などについて意見をいただきたいと思いますが、まずは実態を直接肌で感じておられる小学校、中学校、そして高校も併せて教えていただいて、これからどうするかという議論にもまた加わっていただければと思います。

それでは、安東さんからお願いできますか。

○安東小学校長会長 それでは、失礼いたします。小学校長、安東です。

この結果を見て、率直に感じたのは、学力とか不登校・問題行動等への一定の効果を取組の中で一番に感じました。目標を掲げて、教職員がそれを共有して自覚して取り組んで

きたということが、その結果としてこのような姿が出ているということで、素直にうれし
いし、やっぱり学校みんなで取り組む、岡山市全域で取り組むということの大切さを改め
て痛感しています。

一方で、他者との関わりが低いというのが私は強く気になっています。人が困っている
ときに進んで助けられるというのが低いのは、協力していくとか支え合うとか、みんなで
つくり上げていくとかいう感覚が豊かでないということがうかがえます。これは今後社会
を形成する、市民を育成するという視点から考えたときに、とても心配かなと思っています。

自己肯定感が高いということから、社会を形成するという方向に子どもたちの目を向け
ていったら、きっと社会を形成することに積極的に取り組んでいってくれるだろうと思っ
ています。だから、そうしていくと、きっといつかは夢というものを、もし将来の自分と
社会との関係の持ち方を夢というのだったとしたら、私はこんなふうに社会に接してい
きたい、こんなふうに役に立っていきたい、こういうふうな職業になりたいとか、そういう
将来の自分と社会の関係の持ち方というものを育てていけば、きっと夢というものも高ま
っていくのではないかなと思っています。したがって、社会というもので子どもたちをし
っかり形成していくという意識づけをする教育を今後深めていくことが大事なのかなと、
結果を見て感じました。

○市長 では、服部さん、お願いします。

○服部中学校長会長 失礼します。

私は、平成28年度第1期岡山市教育大綱を策定した際に事務局におりまして、その後、
令和元年度に校長として現場に戻った立場として、現場の雰囲気をお伝えさせていただき
たいなと思います。

まず、安東先生と重なるのですけれども、その当時の岡山市の教育について課題を分析
して、明確な目標を掲げて、具体的に何をするかを示していただいた、それが第1期の
大変大きな成果ではないかなと現場でも感じました。特に授業改革、授業改善においては、
「授業これだけは！」というフォーマットが示されて、全ての学校で取り組んだことで、
先生方の授業づくりの効率がまず上がりました。さらには、目標を達成できた子どもの姿
というのをイメージすることができました。子どもたちにとっても、教科で先生が違っ
ても、考えを深めていく進め方が共通しているので、安心して学べるようになったと感じて
います。

問題行動等では、不登校状態になっている原因や背景を一緒に考えたり具体的な対応について検討したりするために、研修会やケース会議を開くということを具体的に示していただきました。それによって、教職員の対応力の向上につながったと思います。

子どもたちも、自分たちが守るべきルールについて道徳や学級活動等で必ず取り上げて、子どもたち自身が考える機会となったということも大きかったのではないかなと思います。それが本当に今につながっていると実感しています。

調査の結果からは、自己肯定感が高いというのは、学校にいとすごく強く感じます。どういう場面で感じるかという、今の学校では、先生たちは基本的に、子どもの悪いところを見つけて指導するというよりも、子どものよいところを見つけて褒めるということを徹底しています。恐らく家庭でもそのことと同じように、褒めてもらうことが多いと思います。そのために、自己肯定感は高まっているということが言えるのではないかな。

ただし、それは先生から子ども、親から子どもという関係性の中でのことです。例えば友達同士や、部活動やスポーツチーム、習い事の中はどうか、さらに地域社会の中ではそのような機会がどれだけあるのか、そういうようなことが、今後どうしていくかということの一つのヒントになるのではないかなと考えています。

○市長 服部さん、一つだけ聞いていいですか。

○服部中学校長会長 はい。

○市長 2時間以上テレビゲームをしている子どもの割合が全国に比べて10ポイント以上多い、これは何を意味しているのですか。

○服部中学校長会長 いろいろな原因、ファクターがあるとは思いますが、一つは親、家庭の意識に、それを制限しないといけないというか、家で約束事を親と子でしようっているような雰囲気もう少し必要なのではないかなと思います。もちろん学校でも、メディアコントロールという言葉がそこにもありますが、学校でも、試験期間は当然やめましょう、使わないようにしましょうというような呼びかけをしますが、なかなか家でどう使っているかまではコントロールできないというところにジレンマを感じています。

○市長 ここは本当に大きな差が出ているところなのですが、教育委員会でもいいですが、今服部さんが言われたように、今みたいな要素があることは事実なのでしょうけれども、他地域とかそういったところを調べて何が違うのか、今の親の意識みたいな話が出ましたが、何が他都市と違うのかというような分析はできているので

しょうか。

○事務局 教育委員会です。

確かにこのメディアコントロールというものは大きい課題だという認識をしているのですけれども、実際に地域性であったり家庭環境であったり様々な要因があろうかというふうには推察しているのですけれども、かといって、では全国的にどういう傾向にあるかという分析までは至ってないのですが、やはり横並びの状況というのをこれからしっかり把握していく必要があると思っています。

○市長 分かりました。

これは単なる誤差には見えないような数字でもあるし、何らかの要因があるはずで、2時間以上のテレビゲームというのは相当やっぱ子どもたちにあまりいい影響を与えないっていうところはあるだろうと思うので、また次回とか次々回でもいいですけれども、教えていただければと思います。

それでは、矢吹さん、お願いできますか。

○矢吹校長 今、小学校、中学校での子どもたちの育て方について伺って、まさにそのように、一人一人の教師が子どもたち一人一人のよいところを丁寧に見て認めて、それをきちんと本人に伝えている、そういった人間関係の中で、生徒、子どもたちが安心して落ち着いて学校生活を送っている、それが進学をしてきた生徒からも見てとれます。

今市長さんがおっしゃられたメディアコントロールの部分ですけれども、もしかすると、仮説ですけれども、教師や保護者がいいところを褒めるあまりに、厳しさが一つないかもしれない。といいますのが、岡山市もそうですけれども、あまり競争が激しいというか、例えば大都市に行きましたら、高校進学をするための競争が非常に激しい地域もあったりしますけれども、必ずしも激しい競争がなくても、叱咤激励しなくてもいいような穏やかな環境がある。これはいいところでもあるのですけれども、そういった厳しさというところがもしかしたらこういった結果にも出てきているのかもしれないと感じております。

私は、こういった安定感の中で、居心地のよさから抜け出す意識というのが、全国、他の地域に比べてやや子どもたちに低いのかかもしれないなという印象を持っています。ですから、現状の居心地のよさから抜け出して、さらに主体的、積極的な一歩を踏み出すことが、高校に進学してきた子どもたちに必要なことであるという、そういう観点から、先ほどご挨拶の中でも申し上げましたけれども、様々な機会を、学校の外の様々な機関の方々

のご協力を得てそういう機会を提供することに取り組んでいるところでございます。現状が居心地がよければ、夢だとか目標という言葉に表現されるような将来の自分自身のイメージというのを描くことが難しいということにつながっていった、目標がまだ定まらないまま進学をしてきているという子どもたちが割合としては多いような印象を持っております。

○市長 ありがとうございます。何かちょっと目からうろこ的な発言でありました。居心地がいいと、なかなか夢っていうのを持ちにくい。この前、世界一貧しい国が、貧乏っていうのは、これから何を徳たいかっていう、そういう力を、希望をもたらすものだっていうような話がありましたけれども、同じようなイメージかなというように思って、すばらしいご発言ありがとうございます。

それで、片山さん、中島さんの委員のご意見を聞き、それから熊谷教授の意見を聞かせていただき、また教育長は日々この問題に取り組んでおられるので、教育長の意見を聞いた上で、またフリーでディスカッションをさせていただきたいと思います。

それでは、片山さん、よろしくお願いいたします。

○片山教育委員

私も先生方の今お話を伺わせていただいて、本当に学校で子どもたちを温かく一人一人を大切に伸ばす教育をしていただくことが、今の子どもたちの不登校の上げ止まりといたしますか、学校に足が向く、そして学校の居心地がよく、自己肯定感も高めていただける、そういう安心・安全でとてもありがたい場所だと思います。

家庭の状況について言えば、やはり岡山市内でも両立の家庭が増えていると思いますので、そういう意味では、学校でいろんなことを教えてもらう場っていうものの意義というのは非常に大きいと思いますし、先ほどのメディアコントロールに関しましては非常に耳が痛い部分も親としてはあります。確かに、子どもたちの現状を見ますと、非常に学力も安定してきてる、問題行動もいいんですけども、私は一つ、やっぱり一歩が踏み出せない。先ほど、困ってないから一歩が踏み出せないというのもあったのですが、やりたいこととか自分の好きなこととか、そういったことを徹底的に取り組む姿勢っていうのを励ます大人というんでしょうか、何かそういう場をもっと持っていけたらいいのかなと感じています。

最近、うちの子どもたちもそうなんですけれども、職場体験であるとか、それから平和学習だとかいった体験型の学びを、あと修学旅行もそうですけれども、班別自主学習って

いうものを設けていただいて、すごく時間をかけて、子どもたちは、自分たちが何をしたいのか、時間をどう使うのか、お金をどう使うと効率的なのか、主体的によく学びます。やっぱり興味関心があるところで、ICTも駆使して、借りて帰ってくる端末を使って調べますし、得意でない地理も一生懸命地図を見て、どうやったら一番短時間で歩いていけるかとか、やっぱりそこには必要感と、自分たちがこうありたいという欲求とか好奇心とか、そのあたりの自分事の目的意識というのが明確なのだと思うんですね。

私は幼児教育が専門なのですが、幼児教育は教科書がないし、基本的な学びは遊びを通してとか生活を通しての学びで、やりたくないこととか気が向かないことというのは結局生活習慣の部分だけで、基本的な学びは遊びを通して好きなことを通して力を伸ばしていくことになります。そうすると、先ほどの探究型の学習とか、枠のない、自分たちが興味関心を持って目標を立てて進めていくような学習をさらに充実させていただけることが、自分たちがそういったスキルを生かしながら、教科の学習とかまだまだ取り組めていない事柄にも取り組むような意欲づけといいますか、好きなことができたから関心のないこともちょっと頑張ってみようといった体験を、しっかり家庭でも必要だと思うし、学校でも支えていただける、もっと頑張れっていうのもちょっと泥くさいかもしれないの

○市長 ちなみに、私も好きなことを徹底的にやることを後押しするっていいことだなと思いますけれども、特に中学校の世界が多くなるのかな、どんな感じですか。もちろん一定の授業とかそういう枠はあるでしょうが、今の大人って結構そういうものを促進させようっていう雰囲気にはなっているような気がするのですが、そうじゃないですかね。

○服部中学校長会長 まず、授業の中では総合的な学習の時間という時間がありまして、そのときに、大まかな分野についてはそれぞれ学校とか学年で考えます。例えば、福祉について勉強しようというテーマを与えると、子どもたちがその中で自分で興味関心を持つものをパソコン端末を使って調べたりとか図書館に行って調べたりとか、今度はディスカッションしたりとか、場合によってはそれを見に学区の中を探検したりとか、そういう時間を持つようにはなっているので、各学校で学年で計画を立てながらそういう取組をしています。

○市長 それは後押しをしているということ。

○服部中学校長会長 はい、ある程度はしています。

○市長 安東さん、何かあれば。

○安東小学校長会長 同じですね。やっぱり子どもたちが関心あることを大事にしていくような活動というのは、今の教育の中でずっと進めてきていることだと思います。それは教科学習だけじゃなくて、例えば特別活動、学級会活動であったり、児童会活動も含めて、子どもたちが関心を持つことに深く入り込んでいく、追求していく機会を生活全体の中でつくっていくことが大事だし、それをやっていかないといけないかなと思っているところであります。まだまだ十分ではないと思っています。

○市長 若干議論のギャップがあるのかもしれないですけど、また後でその点は。

じゃあ中島さん、お願いします。

○中島教育委員 失礼いたします。中島です。

私からは、今回この9つの観点からのデータを拝見しておりまして、1枚目の学力、体力、問題行動というのはやはり学校サイドの先生方のご努力、共有ということでの部分だと思うので、なかなか私のご意見を話させていただくことは控えたいと思いますが、2枚目、3枚目において、今市長様のほうからご指摘があったメディアコントロールの中学生が高いということと、生活習慣の、同じぐらいの時間に寝ている子どもの割合、中学生は低いのですよね。やっぱりこういうところが連係しているのかなとも思っています。2時間以上メディアをすれば睡眠時間も短くなるとか、必然的なので、今皆様方のお話を伺って、じゃあ子どもたちって、中学生とか、全国と同じ指標というか調査はできないかもしれないですけど、帰宅後どういう割合でどういう時間で何を過ごしていますかみたいなことが分かれば、まだ細分化して調べればその要因が分かるのかなとも思いました。

あと、やはり先ほど先生が言われたように、私の時代には、漫画ばかり見てはいけないうとよく怒られたのですが、今、漫画がアニメという文化になっていますので、読むことが肯定されているのですよね。かといって、先生が言われたように、あまり読んではいけないよみたいなことが言えないので認めてしまうということの、やっぱり社会的に親もいろんなことがあるのかなとも考えています。だから、見ていることとか行動することはいいのだけれど、それがほかに影響して睡眠が短くなるとか勉強する時間が短くなるってということがいけないということはきちっと家庭も指導しないといけないかなと感じました。

自己肯定感に関しましては、本当に恐縮なのですが、事業者としても企業を経営するに当たって、カーネギーという人の「人を動かす」という本があるのですが、そこ

でも再三、褒める、褒める、褒めるっていう言葉があるのですね。やはりそこは子どもの頃から褒めることにより、子どもたちの自分が受ける感じとか自己肯定感が高まることはいいことだなと思いました。

あと、他者への関わりに関しましては、これは本当に子どもだけではなく、私の子どもがもう20歳とか30代なのですけれど、私が街角で、例えば外国人さんとか観光客の方が困られていて、助けは求められてないのですけれど、こっちから助けようとする、「いらないことをしないで」みたいな、次世代の人って恥ずかしがり屋なのか、何かそういう意見が多いと思います。なので、それも全然恥ずかしいことでもなく、どんどん周りとか声を掛け合っていきましょうみたいな、何か一つ子どもたちに呼びかけをしてもいいのかなと思いました。

あと、夢や目標についてなんですけれど、先日、また別の金融機関様にお話をお伺いしたけれど、大学で外に出られた男性が岡山になかなか戻ってこない。女の子は戻るけれど、銀行ですけれど、総合職の男性が少ない分、女性が総合職に就かれているということであって、そういった部分から考えると、岡山という地元にすてきな企業があり、どれだけ魅力がありとか、地元の誇りとか何か魅力を感じるという部分を小学校とか小さい頃からもっと知って、本当に岡山って、実は皆さん知らないけれど、すごい企業がいっぱいあるのですね。そういったことをもっと子どもたちに教えて、岡山ってこんなすてきなところで、こんなこともできるし、こんな文化もあるみたいなことをどんどんどんどん伝えていけば、地元愛も深まったり、またそこに通じる夢や目標にもつながるのではないかなと思いました。

○市長 どうもありがとうございました。

それでは、熊谷先生。

○熊谷教授 失礼いたします。ここまで先生方の意見を聞いて、分析に関してもまさにそのとおりだなというふうに思っただけで聞かせてもらってありがとうございました。

自己肯定感の高さというのは、岡山市の場合、保護者の皆さんや先生方がしっかり子どもたちに関わって、愛されているのだなと。そういうところが子どもたちにしっかり伝わっているからこそ、一般的に自己肯定感というのは低く言うケースが多いのですけれど、このあたりは本当に岡山の子どもたちって恵まれているし、それからこれまでの教育委員会をはじめとした先生方の取組がうまくいっていることなのではないかなと思います。

ただ、矢吹先生が居心地がよいというようなお話をしたときに、私がすぐ思い出したの

が、ソーシャルキャピタルという、社会関係資本という、人と人とのつながりだとか信頼関係っていう見えないつながりというものがどうしてもやっぱり子どもの学力だとか育ちに影響していると。岡山は住みやすいし、気候も穏やかで、つまり子どもたちも、言い方は悪いですけど、生活もしやすいし、先生たちや保護者にしても認めてもらっている。災害等、大きな災害というところが決してないわけではないのですが、豊かである分、ソーシャルキャピタルというのを意図的に育んでいかないと難しいのではないかなと。

学力とソーシャルキャピタルの関係でいうと、例えば福井県だとか秋田だとかそういう、小さい学区で自然環境も厳しくて、雪下ろしとかも人と手伝っていかないといけない。岡山の場合、住みやすい。それが逆に、自分に関わらなくても生活できるというところで、人との関わりだとか他者への関心というところが少し若干低いのではないかなと。ということは、逆にこういう取組を意図的に仕掛けていかないといけないのではないかなと思います。

もうちょっと説明するならば、他国に比べて、自己肯定感とかいろいろ概念があるので、自尊感情だとか自己有用感とかいろんな聞き方があるので、考えていかないといけないのですが、ほかの国に比べて日本の子どもたちは、「対自分」という、自分で捉えるというだけでなく、日本の若者の自尊感情の場合は、自分は他者からどんな存在なのかというところが「対自分」の次元からも影響を非常に受けているということがほかの国に比べてあると。そういうふうに捉えるならば、やっぱり他者とどうやって関わっていったり、自分が当事者意識を持ってやっていくのだというところのあたりですね。他者と協働することによって試行錯誤して活躍できるような場をいかにつくっていくとか、そういう仕掛けを意図的にしていかないと、このあたりの数字っていうのが見えてこない、出てこないのではないかなと思って聞かせてもらいました。

○市長 ソーシャルキャピタルを意図的につくっていく。そうですね、ご指摘のとおりのような気がします。ただ、愛されているから自己肯定感が強いっていうのと、矢吹さんがおっしゃっている厳しさというのがちょっと足りないのではないかな、このバランスというのがすごく難しいですね。このあたりが今後の議論の一つになるような気がいたします。

では、教育長お願いします。

○教育長 まず、話題になっていたメディアコントロールをずっと考えていたのですけれど

ど、資料を見るとお分かりのように、全国中が57、50.3、48.9と下がっているのに、岡山市は横ばいか変わっていない。だから、全国が下がった分析ができれば一番いいのかなと思って見ておりました。ただ、右側の、家の人と約束したことを守っている子どもの割合、服部校長も言われましたけれど、やっぱり上から、これ使ったら駄目とかいうことではもう守れない状況なので、一緒に考えるということが今後のキーワードになるのかなと思って見ました。

それから、私が教育長になって3年目を迎えますが、やる気につながる好奇心のことをいろんな場面で、子どもだけではなくて大人も好奇心がないといけないという話を、学び続けましょうという話はしたのですが、子どもたちが主体的に、自分事としてという言葉もキーワードとしてあったのですけれど、私は芳泉小学校で、3年間校長をさせていただきましたが、大規模校だからかなと思ったのですけれど、感覚ですけれど、自分が自分が出て前に出る子が少ない気がしています。自分一人でこれをリーダーとしてやってやろうという子どもが少なく、みんな一緒というか、横並び感というか。そこはやっていいのだよっていうか、そこは感覚なので言いにくいところがあるのですけれど、自分がやってみて、どんどん失敗しても前へ進んでいくみたいなのところのがつつしたところがちょっと欠けているかなというのは思っています。

その中で、今日、総合的な学習の時間の探究ってところが話題になっていましたけれど、私が現場にいた感覚で、服部校長が言われたとおりで、例えば小学4年生は福祉で、ある程度テーマをくくって、6年生は国際理解とか環境とか、ある程度年間計画でテーマをくくっています。そうしたら、その学年は環境のことしか、調べられなくなるので。逆に言うと、自由に広げて調べさせると、1人しか担任がいないので、進行というか授業のサポートが難しいかなと思う面はあるんですけれど、ただ、ここは矢吹校長に後で聞きたいのですけれど、後楽館高校は探究をやられていますよね。あれは自分で調べたいグループをつくって、最終発表まで至って、それが子ども議会に来られた内容になります。自分で調べたいと思ったことをとことん調べていくっていう経験を今後一緒に考えられたらいいかなと僕も思っていて、そうする経験は子どもたちにとって、一歩踏み出すとか、何とか自分事で考えると、そういうことにつながると思います。岡山の子は、失敗したらいけないという雰囲気が多いのかなと思っています。

○市長 矢吹さん、何かありますか。

○矢吹校長 後楽館の取組を評価していただきましてありがとうございます。

実際に高等学校年齢になってくると、まさに出口が多様になりますから、その出口につながる自分の興味関心の掘り起こしから、1年生の間に始まって、そこから自分の興味関心が本当にあることについてそれぞれ分かれていく。後楽館高校が行っている探究学習は本当に、教師が与えているテーマではなくて、子どもたちが自分で探してきたテーマです。ですから、必ずしも教師がそれを指導できるわけではなく、教師が指導できない、社会の中で一体どのように動いているか、このテーマについてはというところは、地域の皆様方のご支援をいただいているというところです。

そのためには、まず岡山市の地域にどういった課題があるのか、どういうところで誰がどんな動きをしているのかということを知るために、1年生の間には徹底的に、講演会ですとかいろんなセミナーだとかそういうところに、学校に様々な分野の方にお越しただいていろんな話を聞かせていただく、インプットをする。そのインプットのところできちんと理解できるだけの基礎的な学力はやはり必要だろうと思っております。

4人程度の一つのグループで探究活動をしていくのですけれども、それは仲よしグループではなくて、子ども一人一人が何に興味を持っているかという調査を行って、教師がその同じ関心を持っている子たちを集めてグループを設定します。そうすると、自分の仲よしではなくて、初めてそこで出会って初めて言葉を交わすような、いわゆる系列を超えた、例えば建築系列の子と福祉の系列の子が一緒になっている、大学進学を目指している子と国際交流のことに興味を持っている子が一緒になるとか、そういうふうなところで、まずお互いのコミュニケーションができるという、そういうところから始めて、そのグループで最後卒業までプレゼン発表して論文をまとめるというところで終わっている、それが後楽館高校が今実際に行っている探究活動です。

実は、キャリア教育としての探究活動を柱にしている、この教育は、後楽館高校に与えられているスクールミッション。このスクールミッションというのは、令和3年1月の中教審答申を踏まえて、令和3年度に岡山市、設置者が再定義をしていただいた、そのスクールミッションなのですけれども、このような言葉があります。地域や世界とつながり、他者との協働活動を通じて、自他を尊重できる持続可能な社会の創り手を育成する。社会の創り手というのは、誰かがつくった、もう既にある社会の中に自分も加わるというのではなくて、自分が自ら社会をつくっていくという能動的な態度を育成するということです。それについて、本校では、主体的に社会に関わって貢献するという体験、これが成功体験となって未来の持続可能な社会の創り手になると信じて、この教育方針で行っている

ところでございます。

○市長 ありがとうございます。幾つかのキーワードがあったような気がいたします。

中島さんがおっしゃった地元の誇りっていう話がありましたけれども、まず知らない
と、地元の誇りというのは芽生えてきません。だから、そういう面で、今矢吹さんがおっ
しゃった様々なことをインプットするっていうところにも、ちょっと意味合いが違うかも
しれませんが、ある面共通したことなのかなというのが一つであります。

そしてあと、熊谷さんがおっしゃった、愛されるから自己肯定感、これはカーネギーさ
んにもつながってくる話でありますけれども、ただ、愛されていれば、いくらゲームやっ
たっていいのかというところがある。だから、厳しさが足りない、居心地がいいというの
も一定程度でいいのではないかっていうような話などがあったわけです。

それから、がつがつ感が足りないというのが教育長から言われて、これは初めて教育長
の口から聞いたのですけれど、昔からそんなに、中学校時代からあまりがつがつ感が顕著
なもの、自然に人間形成はされてきますから、あっていけないってわけじゃないのだけれ
ど、そのあたりの感想とか、いくつかの論点があったと思うのですが、急に解が出る話で
はありませんけれども、あとはソーシャルキャピタルの話、ネットワークづくりみたいな
もの。熊谷さんはどちらのご出身なのですか。

○熊谷教授 私は島根県です。島根の石見国。

○市長 それはやっぱり雪が降るし、そういう面では、雪かきをやるだけで、雪かきをや
られるとこかどうかはよく分かりませんが、そういったところというのは、人間の団結力
というのが強くて、私も東京にいるときに青森とか岩手の人と話すと、秋田とか、そうい
うことを感じましたね。

○熊谷教授 私は島根県の中でも一番西のほうの、あまり雪とかはないのですけれど…。

○市長 それは失礼しました。

○熊谷教授 郷土の偉人というと、津和野のほうで、森鷗外。森林太郎の墓があるのです
けれど、「我石見人として死せんと欲す」というのが書いてあるのです。ですから、田舎
から出てきて、もちろん郷土を愛することは大切なのですが、日本で、岡山市以外で
も活躍しながら、やっぱり岡山人だっというアイデンティティーというものを持った子ど
もたちに育ってほしいなと。

そのために、他者との関わりというところとか、よく地域との連携で、イン、ア
バウト、フォー、ウィズっていうことで、発達段階に応じて取組をしたらどうだというこ

とがよく言われています。インは地域の中で、幼児教育や小学校低学年は地域の中で。アバウトは、ふるさと学習とかで地域についてしっかり知ると。このあたりは非常に岡山市も、こういう愛着だとか自己肯定感を見ていると非常に高いというのは、よくできているのではないかなと思って、次の小学校高学年や中学校に行くと、フォー、地域のためにというところですね。対他者という中で、自分は役に立っているだとか当事者意識という、このあたりを育んでいったり、あるいはウィズ、一緒に地域の一人と、この辺が鍵を握っているかなと思って聞かせてもらいました。

○市長 なるほど。森鷗外がそこだとは知りませんでしたけれども、森鷗外は他者への思いやりがすごい強い人だと。軍の中の医者をやられても全く偉ぶることなく誰にでも接しているということで有名な方、さすが熊谷さんの。

そろそろ次の大綱の議論をしないといけないということで、今のそれぞれの意見を踏まえて今後の方向性について、議論をしたいと思います。そこで様々な今の意見に対する質問もあっていいのではないかなと思います。

1点だけ、私が次の大綱でちょっと整理をしておいてもらいたいと思うのは、事務局へでもあるのですが、安東さんと服部さんが期せずして、第1期の大綱で先生たちの授業のつくり方とかそのあたりが非常にうまくいって学力がよくなったというような話をされています。私も両氏と共に議論したこともあるのでよく覚えておりますけれども、具体的にもうそろそろ、何をやったのかということをも3期の大綱のときは具体的に整理をして、それを残しておくということが重要なのではないかなと。どうしても惰性になっていくということがあるのだろうと思います。そこをまだブラッシュアップできる場所もあるはずですから、学力、不登校、それらが改善されたということが一体なぜできたのか、それをより継続的に、別に偏差値を上げることを目的としているわけではありませんが、子どもたちにきちっとこれからもすばらしい教育を続けられるように、各論をまとめといていただければというように思います。

それでは、次期大綱の方向性や柱についてご意見をいただければと思います。誰からでも結構でございます。

○服部中学校長会長 一つだけ、メディアコントロールのことですけれど、蛇足になるかもしれませんが、さっき漫画からアニメになって文化になったというお話がありましたが、ゲームもeスポーツというのが出てきて、スポーツになりつつあります。実際に本校の子も、学校推薦で高等学校に、eスポーツ部のある学校に進学した子も出てきました。

そういうふうには価値観というのがだんだん変わってきている中で、一概に2時間以上やったら駄目とかっていうのではなくて、別に、その2時間何をするのかとか、そういうようなことがもっと大切なんじゃないかなというのを今現場では感じています。それは部活動も含めての話ですけど。

○市長 おっしゃるとおりだと思います。ただ、何千人、オーダー的には5,000掛ける6の9の、5万人ぐらいいる、その平均としてこういうふうになっているのは、私は違うのではないかなと思い、もちろんeスポーツで好きなことを思い切ってやるっていうのは、それはいいことだと思いますよ。でも、目的を持ってやっているのか、やってないのか、それをどういうふうに把握していくのかっていうのが必要なのではないかなと思いますけれどね。

○服部中学校長会長 その把握分析の仕方を今は研究して、次のステップへ進むべきだと私も思っております。

もう一個というか、全国の政令指定都市の中学校長会というのがありまして、この2年、参加をさせていただきました。まだまだ頑張らないといけないと思うのは、例えばICTの活用ですとかそのあたりは追いついてはきているのですけれども、もっともっと先へ進んでいる自治体もあります。

岡山がトップランナーだなというも感じているのはコミュニティ・スクールです。地域協働学校、これは明らかにトップランナーで、ほかの政令市の先生方の話を聞くと、まだまだこれからです、まだうちは始めてもいませんというようなお話を聞きます。

なぜそれがトップランナーになり得たのかというと、岡山市が主導でそういうことを進めていただいたというのももちろんあるし、もう一つは、OBの意識の中に、我が町、我が村、我が学校という認識が岡山は非常に根強くある。学校を地域社会が盛り上げていきたい、いかないといけないという意識がすごく強くあるというところが後押しをしてくださったと思います。

それと子どもをどうつないでいくかというところが僕は課題だと思っていて、学校の中では子どもが主役っていうのを私もずっと言ってきて、先生方には常に、先生方が子ども全体の前に立ってしゃべることはもうやめてくださいと、前に立ってしゃべるのは子どもですっていうお話をして、それが大分定着をしてきました。先日も、体育会が終わった後、先生が最後にしゃべろうとするので、ちょっとやめてと言って、生徒会長と保健体育委員長に話をさせました。というようなことが根づいてくると、子どもたちはやっぱり我

が事として考えて動きます。

そういうのが今度は地域社会に広がっていくこと、さっきのソーシャルキャピタルで、意図的につくっていかないといけないと熊谷先生がおっしゃられたのはまさに私も大賛成で、特に先生や親のいないところ、影響が少ないところで、子どもたちがそういう活躍の場を得られる、その中で自分で主体的に考えていくっていう、これは矢吹先生のお話とも共通するんですけれども、そういうことを意図的に学校外のところでもつくっていただくということが私はいいことではないか。一つ例を挙げると、わくわく子どもまつり in 岡山ドームというのを毎年開いていて、2次元コードを中学校に掲示をしていたら、それを子どもたちが読み込んで自分で応募して、ボランティアで参加する。本校からも何人か毎年参加をしているのですけれども、まさに先生も親もいないところで、自分が主体的に応募をして活躍をするという場、そういう場がもっともって増えていけばいいなということを感じています。

○市長 ありがとうございます。

安東さん。

○安東小学校長会長 今のような社会参画とか地域貢献とか、そういうものもやっぱり大事だと思います。小学校の段階でどういうものが要るのかなと考えます。

そうなったときには、自分たちが動けばこの生活や社会はよくなる、楽しくなるという体験が一つまずいるかなと思っています。もう一つは、地域にあるものとか周りにあるものとかそういうものが好きだという気持ちが大事だと思います。2点についてお話をします。

まず、学校の中でいいと思うのですけれど、クラスとか、あるいは委員会活動とか、それから児童会活動とか、そういうことに一生懸命打ち込んだらみんなが楽しく暮らせる。例えば、委員会でクイズをつくって学校みんなに楽しんでもらうとか、クラスで例えばみんなが気持ちよく過ごせるようにルールをつくったりお楽しみ会をしたりとか、そういうふうに分たちでこの生活を変えていったら楽しくなる、過ごしやすくなるということをしっかり体験させる必要があるのかなと思います。そうしていくと、社会は自分の手で変えられる、地域や町は自分たちがつくっていくことができるというそもそもの体験になっていくかなと思います。それがなかったら、地域貢献とか社会参画しようという気持ちにもならないだろうと思います。だから、自分たちが動けば過ごしやすくなる、楽しくなると基本的な体験を小学校段階から積んでいく必要があるかなと思います。言葉で言った

ら、生活を自分たちでつくるっていうことを大切にすることが他者に関わることとかの大本になるのかなと考えています。

もう一点は、好きだという話です。友だちが好きとか学校が好きとか、この地域にあるものが好きとかいうことがないと、大切にしていこうとしません。人はやっぱり好きだからそのことを大切にしようと思います。だから、子どもたちにはいろんなものに触れさせて、好きっていう気持ちを持てるような機会を教育課程に位置づけていく必要があるかなと思っています。例えば、プロスポーツ選手でもいい、それから歴史上の偉人でもいい、地域のいろんなことをしてくださっている人でもいい、いろんな人に触れさせるような体験が要るでしょう。それから、この町ではこんな生き物がいるよ、こんな遊び場があってみんなが豊かに過ごせる空間について目を向けさせることも大事でしょう。それから、例えばこの町にはこんな文化があるよ、こんな行事や伝承があるよ、それからこんな史跡があったり、こういう成り立ちがあるという時間軸でもって考えさせることも必要でしょう。ここにはいろんないいことがあるということを知る体験を、いろいろな教科学習、それは図工や美術の中で作品に触れさせることかもしれないし、例えば音楽の中で、地域にあるような音頭とか祭りの歌とかに触れさせることもあるかもしれません。体育とかで、例えばプロスポーツとか、うらじゃとか、あるいはうらじゃをつくってきた人たちの努力や工夫とかに触れさせるとかいうことをしていくことで好きだということに結びつくと考えています。

社会に関わるということの自分の有用性、それから好きっていうことを持たせるという、この2点がこれからの教育にとって重要だなと思っています。

○市長 ありがとうございます。

○矢吹校長 後楽館高校には、育成を目指す資質能力に関する方針という、いわゆるグラデュエーションポリシー、卒業までにこんな子どもを育てたいというポリシーがあって、それを公表しております。その中に、こんな言葉もあります。主体的に社会に関わり貢献することができる力、あるいは、異なる考え方や個性を持つ他者と対話による理解に基づいた共生社会を実現することができる力。最初にも申しましたように、岡山市唯一の高等学校ということで、これが恐らく岡山で育てたい子どもたちの最終形ということであると考えれば、小・中、高等学校が同じ目指す方向を共有するということはとても大切だと思っております。しかし、必ずしも同質な児童・生徒、同じような子どもの姿を目指すのではないということを私は感じております。

持続可能な社会の作り手という中で最も重要なのは、多様であること。多様であるというのは、具体的に言うと、異年齢の人たちと関わる、あるいは異文化の人たちと関わるということ。そういったことで、本校が入学するまでに身につけておいてほしいという、いわゆる求める生徒像、アドミッションポリシーとして、小学校、中学校の間に求めている力としては、いくつかあるけれども、その中の一つ、地域行事や社会貢献活動、国際交流などに積極的に参加をし、多様な価値観を理解し受け入れる力を持った生徒ということを掲げております。ですから、それが最終的に岡山市で育てていく子どもたちの目標に必要な力と考えて、こういったアドミッションポリシーを掲げているところでございます。

○市長 ありがとうございます。取りあえず全体をまたお伺いしてからお話ししたいと思えますけれども、どうでしょうか。

○熊谷教授 まず一つは、今回のこのデータの分析ということに関して、こういうふうに表示してくださって、これまでの流れも分かって分かりやすかったと思うのですが、ただやっぱり岡山市の学校というのは言ってみれば日本の縮図のようなところがあって、非常に大規模な学校もあれば、実は非常に小規模学校も岡山市って多いわけですね。そういうふうになると、ひとくくりに岡山市の学校ってデータで捉えていいのかという問題があって、大規模校の学校と小規模校の子どもたちを、データの的に、例えばさっきのメディアのことも違いがあるかもしれません。そのあたりをひとくくりに岡山市の学校と捉えるのではなくて、もうちょっと細かい分析だとかをしてもらおうと、もっと議論できるのではないかなと、これが一つ、データに関する要望等です。

それからもう一点は、子どもたちが社会と関わって貢献感だとかを育んでいく、これはもう委員の先生方の話を聞いて全く私もそのとおりで思ったのですが、これは子どもたちだけに背負わせるのではなくて、我々大人への働きかけっていうことも大切だと思うのです。教育大綱って、子どもの教育のことがメインですけど、もう少し大人だとか地域の人というの、例えばコミュニティ・スクールのことがトップランナーと出ましたけれど、もちろん岡山市はコミュニティ・スクールを全部設置していますし、いい学校もたくさんあります。しかし、もうちょっと子どもに地域の人が当事者意識を持って関わってもらおうやとかっていう働きかけ。私も若かりしときに岡山市の岡山っ子育成条例に何十年前に関わったときには、本当に委員の方が手弁当で集まって、事業所の方や家庭の保護者の代表と話し合った記憶があるんです。そんな形で、子どもたちだけでなく大人たちへの働きかけや、そういうことも教育大綱に項目を入れてもらえたらどうかと思います。

ます。

それから最後は、そうした教育を伸ばしていくのは教員の力が必要で、探究学習、それから最近シビックプライドというような形で地域への愛着だとかを持っていこうと。こういう教育をするってことは、先生の意識を変えてもらわないといけなくて、矢吹先生の発言を聞いて私は思ったのですが、教員って自分の知っていることを教えたがりますし、枠から外れたことってやっぱり嫌がる。でも、探究学習って実は枠から外れる学びなんです。それを先生のほうも、それでいいんだと。一緒に子どもたちと答えのない学びに取り組んでいくというようなことって、簡単そうで意外に難しい。それって教員の意識や力をつけていくということが大切なので、新しい教育センターが岡山市にもできます。そういう意味で、教員養成とか研修というのを、これは岡山大学とも連携しながら、教員への力をつけさせていくという、子どもに対する教育大綱ですけど、それを取り巻く大人たちへのメッセージみたいなものも入れていただくというほうがいいのではないかなと思ったりしたところです。

○市長 おっしゃるとおりだと思います。当初、我々が一番、こういう小学校の状態じゃまずいじゃないかということで、最も変えてほしいと言ったのは先生たち。子どもたちは、普通にいい子たちばかりなんですけれど、先生たちの動きに少し問題があったんじゃないかということでやらせていただいたところでもあります。このシビックプライドというのはそのとおりだと思うので、そのあたりをどうするかというのはあるだろうと思います。

それからあと、大規模校、小規模校というのはおっしゃるとおりですけど、ただやっぱり共通の概念整理はどうしても必要なので、ケースを分けて考えないといけない。

○中島教育委員 私は地元企業の人間なので、やっぱりそこに執着しますけれども、地元の誇りというか、それを子どもたちには持つてほしいと思いますし、ある企業の代表で、そこは全国レベルの社長さんが、今京都にいらっしゃるのですけれど、岡山の人全然岡山のことをよく言わんと。岡山は何もないところなんだと、全然何も言わんっていうことをよく言われていて、住みやすいし食べ物もおいしいし、いろんないいことがあるというのが、やっぱり県民性というか気質があるのかなと思っています。

私が今回教育委員会に携わらせていただいた雑談の中で、実は国指定の史跡は京都に続いて2番目だとか、何かが指定都市第1位とか、私は本当にそこまで知らなくて、委員会の皆さんでも、へえ、みたいな話だったのですけれど、そういうことをもっともっと子ど

もたちに伝えて、岡山市はこんなにすばらしいのだ、こんな企業があるのだ、こういう形なんだっていうことをどんどんどんどん伝えてあげることによって、自分の住んでところの誇りというものが子どもたちに備わって、そこにこんなすばらしい企業があればということで、じゃあそこに勤めたいとか、そこは世界にどういう携わりをしている会社なのかとか、そういうことに子どもたちが興味を示してくれればうれしいかなと常々思っている次第です。

○市長 ある有名な言葉があって、家族を好きになりなさい、家族を好きになれないと地域は好きになれません。地域を好きになりなさい、地域を好きになれないと国は好きになれません。基本は家族であり、地域であり、そういうことだろうと思います。おっしゃることはよく分かりました。

○片山教育委員 私はやはり、今の子どもたちの体験の世界、先ほど体験という言葉がたくさん出たのですけれども、メディアの中は全て非直接的な体験が多いと思います。あと、消せるとか、その世界に入らなければ見なくてすむとか、何かそういうところでの関わりが増えることの懸念があります。

ですので、学校というのは全て体験型で、人とも関わらないといけないし、そしてけんかもあるかもしれないですけど、でも多分、幼児期もそうなのですけど、けんかがすごい減っているような気がします。何となくみんな、譲るわけじゃないのですけれど、主張しないのもあるのかなと。そこで先生たちも困った感が持てるように、例えば道具の出す量を調整したりして、何とかいざこざが起こるように仕向けても、おうちに帰ったら似たようなのがあるからいいやとか、そうやって結構、がつがつしないじゃないですけど、困っていないですね。

だから、そういう意味で、直接体験の中で自分を出していけることという表現力とか、あとさっきのメディアに関して言うと、学校であれだけ関わっているはずなのに、家に帰ってメディアですごくやり取りしているし、どうもT i k T o kとかは各お子さんで出ている方もいらっちゃって、そこで学校とは違う面をいろいろ知るっていう側面もどうもあるようです。だから、T i k T o kがあることのよさもあるし、それは制限できないのですけれども、何かそこで直接関わらなくてT i k T o kの世界で出す自分っていうのをもっともっと学校の中で出す場というのがあったらいいなというようなことを思うこともあります。

ただ、昨年度、中学校のI C Tでの授業なんかを見せていただきますと、本当に上手に

使って、新しく今度導入された学習ソフトなんかもそうですけれど、今みんなが、発言について、手を挙げてできなかった生徒さん、児童の皆さんも、書き込むことで自己主張できるっていう、そういう自分を発信する、T i k T o k もきっと知ってほしいというのがあると思うのです。得意をしっかり表現するとか発信するっていうところで、自分の肯定感が高いけれど、積極的には出さなくても、いいところを見つけてくれるっていうところがあると思うのです。だから、見つけてもらうのを待っているのではなくて、こういうところも私はあるよというところを出していける場とか、そういう表現の場というか、可能性を開くというか、そういうところも何か挑戦できると、もし失敗してもそこはフォローできるし、次はどうしたらいいかみんなで考えようということで、そこの試行錯誤とか、あと、くじけないというような、そういう感情の調整力とか、そのあたりも今、非認知能力というところすごく重要視されていると思うのですけれども、粘り強く取り組む、諦めないみたいな、そういう意味でのがつがつさというのも育てていける学校の間というの、家庭もそうなんですけれども、期待したいなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

では、教育長。

○教育長 私も2点ありまして、国が言っている社会の創り手とか社会的自立、このあたりを私は気になっているというか、大事にしたいところだと思います。市長が言われたように、一番小さい社会の単位は家族、そして学校、地域と広がっていくわけですけど、その段階を追いながら、何とか最後、熊谷先生が言われたように、地域のためにとか、一緒にやっていくという創り手になるのに、もう一方で考えたのは、安東さんが言われたように、知った上で好きになるっていうところが、地元を好きになるとか懂れるとかいう気持ちが必要だと思うのですけれど、その先に感謝の念があるのだろうなと思っていて、ありがとう、地元にありがとうとか家族にありがとうとか、そういう感謝の念が芽生えたときには、僕もそういうありがとうと言われることをしたいみたいなことになっていくのではないかなと思っています。

○市長 ありがとうございます。

大分時間もたってきたのですが、特に何かというのがありますか。事務局のほう、どうですか、ありますか。よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 皆さん方から意見をいただきました。様々な視点が整理をされたと思います。

ちょっとその前に、最初に言われた楽しい学校という、この「楽しい」とは何だっているね。楽しいというのは、刹那的に捉えると、かえって、楽しいだけでいいのかという話になって、楽しいというのは全体の充実感であったり、様々な点を含めての表現ということではあるのですが、我々の目指すべき学校のキーワードみたいなものはどうすればいいのかというような議論をしたほうがいいのかなど。多分、安東さんも、そういう刹那的なものではないと思います。だから、逆に言うと、楽しいってという言葉に含まれる意味って一体何だということろを、整理をする必要があるのかなと。次の機会でもた議論をさせていただき、何かあればあれですが。

○安東小学校長会長 今思っているのは、まず役に立つということだと思います。何かの役に立つと楽しい、うれしい。それから例えば、これはうまくできた、そういう楽しい、うれしい。それから、友達と一緒にできたら、それ自体が楽しい。それから、いろんな工夫、自分のアイデア、自分の発想が生かせたら楽しい。それから、その出来事自体に感動がある、感動するものに触れられて楽しい。こういった5つぐらいの要素があるかなと自分では思っています。だから、そこにいろんな社会的な価値とか文化的な価値とかいろいろなものに触れさせていく中で、今のような学習活動がなされていくと、トータルとして楽しい、学びのある楽しさになると思っています。

○市長 そうですね、意味はよく分かりましたけれど、それを楽しいという表現で整理するのがいいかどうかというのは少し議論をする必要があるかなという感じがいたしました。

それから、多くの方の議論で、地域っていう話がありました。地域も一体どういう単位で考えていくのかというところは重要なのではないかなと思います。岡山市だと岡山市内というのが一番広範になるのかといたら、そうでもないのではないかなと。例えば、今私が一生懸命やっている古代の吉備というと、和気は入らないんですけど、もうちょっと西から福山まで入っていく、こういう地域になっていく。宇喜多の50万石でいうと、美作までが入っていく。こういうこともあってもいいし、逆に、もっと狭い範囲で物を捉える場合もあってもいい。地域ってどういう単位で捉えればいいのか、それを誰が判断していくのか、地域っていうのがキーワードに、なっていくのだろうという気がしますね。

それから、多様な価値観とっている、多様性というね。これは私、この前、ある大きな研究所の、何を求めるかっていう、各国民アンケートを見ると、バブルの頃って完全に仕事なんですよ。その前は、家族の絆なんです。家族の絆、仕事。今は何がトップかって

いうと、トップがない。いろいろな要素が、例えば多様性みたいなのもそうだし、いろんなものが交ざっている。それこそ多様性じゃないかと思うのだけれど、そういう価値観の変化を教育の中でどう捉えていくか、これも皆さん方がおっしゃったことなんだろうと思います。

それから、何ととっても、この教育大綱って何のためにあるかってことを考えると、子どものためにある。子どものためにあるものは誰が子どものために動いていくかっていうことになる、先生だと思います。ただ、先生だけじゃないというのは、熊谷さんがおっしゃったように、町内会の人というのものもあるだろうし、様々な、保護者もそうですね、そういった人に何を求めていくかっていうこともやっていかないとならないという感じがいたしました。

そのほか様々な切り口を整理していただいたので、これは次回総合教育会議において具体的な取組についても議論できればと考えています。要は今みたいなものを整理し、提示をさせていただきながら、それをどうブレイクダウンしていくかということをもた議論させていただければと思います。次は次回場で議論をさせていただくということで、マイクを事務局に戻します。

○司会　ありがとうございました。

次回の会議につきましては、改めて通知させていただきます。

以上で令和7年度第1回総合教育会議を閉会いたします。本日はお疲れさまでした。

午後4時53分　閉会